

『ミドルマーチ』小論

—ガースの倫理について—

山本和平

はじめに

ジョージ・エリオットの小説『ミドルマーチ』(1871—72)は、1873年のヘンリ・ジェイムズの書評以来、彼女の傑作としてほとんど見解の一致をみている。「ミドルマーチ」とは⁽¹⁾イングランド中部地方の一都市、コヴェントリがモデルといわれるが、ここを舞台に「地方生活」が展開されている。しかしこの小説は、「社会」を描いたというよりもむしろ「結婚」という個人的人間関係の種々相を倫理的視角から追及した作品と見るべきである。⁽²⁾

本論は『ミドルマーチ』の世界を構成する一小部分にすぎないガース家の人々に注目し、この小説の主役たち——ドロシア、リドゲイト、カソーボン、ロザモンド——の行動様式と対照的なガースの倫理的な意義を検討することにある。

ガース家は彼ら主役たちの内的葛藤の世界から、生活的にも精神的にもいわば孤立した共同体——ジョージ・ヘンリ・ルイスによれば「^{ジュエム}宝玉」——をなしており、端役とはいえ彼らの世界の実相を逆照明する役割をはたしているのである。⁽³⁾

最小単位の血縁共同体たる「家族」の核が結婚による夫婦関係であることはいうまでもない。そして結婚が法律的・慣習的側面のほかに情念の側面をもつ以上、そこに結婚(あるいは恋愛)は当然文学的探求の対象となる理由がでてくる。

ことに「家」の共同体的緊縛が、個人的自由の主張のなかに崩壊し、また社会が個人的自由を疎外する慣習的な閉じられた社会と化するとき、そこに反社会的な個性の劇が展開されてこれが文学の(とくに、社会の複雑さとそれに対応する内面的な複雑さを解明するには、分析と説得とを武器とする「小説」の)対象となるのは自然である。

ガース家の倫理はこうした近代的な葛藤から自由な、前近代的な、いわば「共同体

的」とも形容しうべき関係のなかに、しかし理想的な形で——「宝玉」の比喩を参照——生きている。むろん端役的存在にすぎないから劇的展開の興味はほとんどないが、叙上の意味で、ガース的な人間関係の論理について集中的な考察をおこなうことは意味があるとおもう。まずガースの倫理の一般論を述べ、次にテキストの引用によって、それを具体的にあとづけ、最後に、『ミドルマーチ』の主演ドロシアの結婚の理想と現実を物語の展開に即して検討して、対照的なこの二つの人間関係を、ジョージ・エリオットの思想構造の往復運動として示したいと思う。

第一章 ガースの人間関係の倫理

小説の末尾で主要人物たちの後日譚が物語られるがその中で作者は主人公ドロシアの経験を回顧し、これを次のように要約・一般化している。

ドロシアの生涯の決定的な諸行為は……いろいろ不完全な社会的条件のなかで苦闘する若く高貴な衝動のうみだした雑多な成果であった。かかる社会的諸条件のもとでは偉大な感情が誤謬の、偉大な信念が幻想 (illusion) の観を呈することはしばしばある。なぜなら外部に存在するものによって大きく決定されないほど強力な内的存在をもつひとはないからである……テレーザやアンチゴネの熱烈な行為が実現された媒体は永遠に失われてしまったのだ……

これはこの作品の「序」にのべられた「機会の卑小さに釣りあわない精神の崇高さの所産」という近代のテレーザの運命の説明と同じものである。

この発想の基本には、「個人」(個性的な魂)と「社会」(自由な精神を疎外する外界)との簡明な対立と、「決定される」‘determined’ というコトバから推測しうるように「個人」は「社会」にたいして専ら受動的な存在でしかないという諦念に似た「社会」観があるとみてよい。それはテレーザやアンチゴネのごとき ‘national idea’, ‘epic life’ ‘life beyond self’ を展開する「媒体」(「一貫した社会的信念および社会秩序」)⁽¹⁾ が永遠に失われた、したがってそれは illusion の中にしか存在しえないという認識にもあらわれている。⁽²⁾

こうしたエリオットの基本的思考のボタンを僕らはほとんど「決定論」「宿命論」と呼んでいいであろう。「社会」観に見られるこの決定論的傾向は、作中人物の描写の仕方において、いかにその変貌の相を精緻に描出しようとも根本的にそのパーソナ

リティが変革されることはないところにもあらわれているが、「人間」観をも規定しているのである。

(3)
 しかれば、ミドルマーチのブルジョアや地主の慣習的・自己満足的・閉鎖的な、要するにエゴイスト的な現実に対して、開かれた・自由な・パブリックな精神はどの方向にむかって社会変革を試みるべきか、一切の社会的努力は所詮空しいのか、諦念をもって現状を容認すべきなのか、となると必ずしもそうでもない。

前記の引用に続けて次のように言うとき、ドロシアのテレザの熱情の disillusion への不可避性に対する哀惜の声調だけではなく、ドロシアの敗北の経験を経た現実洞察にたつ素朴な隣人愛を、おそらく唯一の可能な社会的行為として正当化したいという願望がきかれるのである。

しかし周囲の人々への彼女の影響ははかりしれないほど広い範囲に及んだ。この世の善の増大は一部には、歴史的ではない行為に左右されるし、またわれわれの現状が思ったほど悪くないのは、誠実に無名の生涯をおくって、訪なう人もない墓に眠っている人々に、なかば負っているからである。

すなわち、ドロシアの社会的善への志向は依然肯定され推賞されてはいるが、テレザ的社会変革の情熱は伝統的な「隣人愛」へと矮小化し、社会理論は人格主義的教育論へと転化した感じがないのもないのである。ここにジョージ・エリオットの「保守的改良主義」が明瞭だが、そもそもドロシアはミドルマーチ社会と闘ったかというところではなく、社会悪はカソーボン個人のエゴイズムの悪にいわばすりかえられ、彼女が闘った凄惨な内面劇はついに社会悪の核心に迫ることなく終わったのである。

これはエリオットの「社会」観、あるいは「社会」感覚に窮極的にはよるであろう。レイモンド・ウィリアムズは「かくもすばらしい知性とかくも鋭敏な共感の持主がこれ以上考えられなかったのは行きづまった社会のしるし」としてエリオットの社会観にみられるある種の敗北主義の不可避性を指摘している。

直接エリオットの社会観を知るには小説『急進主義者フェリックス・ホルト』(1866)及び「フェリックス・ホルトの労働者への演説」(1868)が最も適当である。

この「演説」はディズレリが1867年、エディンバラの労働者にむかって行った選挙法改正に関する演説にならって出版者ブラック・ウッドの要請により書いたものである。(5) 要するに労働組合運動の過激化を警め、伝統的秩序と文化遺産をまもり、労働者みずからの教養を高めることによって漸進的に住みよい社会へ移行せしむべきだと

説いたもので、こうした階級対立に由来する問題を個人の倫理・教育の問題にすりかえるところに、ジョージ・エリオットの保守性がかなり露骨の形であらわれている。ジョーゼフ・ジュイコブズがいているように「急進主義者フェリックス・ホルトはむしろ保守主義者フェリックス・ホルトである。彼はトーリー・デモクラットではない。」といえよう。

⁽⁶⁾ 急進的変革に対する伝統的秩序の維持に表明された保守性は同じ演説中の「この世における物事の本質（‘the nature of things’）はわれわれにはすでに決定されてしまっている」という一文にもあきらかである。

こうした「社会」観においては、人格主義的倫理が、教養が強調され、労働階級の利害ではなく隣人愛が説かれるのはいうまでもあるまい。

個々人の隣人愛に由る社会的善の滲透の努力はラジスロウとの対話の中でもドロシアの信念としてはっきり語られている。

（私の信念というのは）完璧な善を希求することによって——たとえそれがなにかわからず、またしたいと思ってもできない時でも——、わたしたちは悪に抗する神聖な力の一部となります。——光の範囲を広げ闇との闘いを一層狭めていくのです。⁽⁷⁾

また「私は利己的な欲望をもちたくありません。他のひとのためにはなりませんもの。」という台詞からもうかがわれるように極めて素朴な自己否定＝隣人愛に社会改革の（唯一の）可能な手段を見出そうとしていることが解る。

ところでこうしたドロシアの社会的善への情熱を全面的に支持して、ケイレブ・ガスは次のように言う。

「ドロシアさんはわしが少年の頃よく考えていたのと同じことを言ったんだ——『ガスさん、私、年をとったときにこう思いたいんです。私は大きな土地を改良してたくさんの良い家〔小作人のための〕を建てたと。この仕事そのものが健康によいし、できあがれば人々が幸福になりますもの。』こう言ったんだ。あのひとはこんなふうにも物事をみている。」⁽⁸⁾

ミドルマーチの社会悪ととともに抗争することのないガスとあのドロシアとは少くとも社会的善への志向においては共通であるところに注意しよう。

このケイレブ・ガスの性格について作者は「自分には厳しく他人には寛大な稀な

人々のひとり」と言い、又ガス夫人はその夫について「ただ働き(working with-out pay⁽⁹⁾)に淫している⁽¹⁰⁾」と言っている。要するにエゴイズムの否定ないしは欠如が自己喪失におちいることなく共同体の間関係——エリオットの‘fellowship’——のなかで積極的な社会的善への志向と結びついているのだ。しかしドロシアが彼女なりの精神的苦闘の代償を払って獲得した「知慧」がガスの倫理の基礎としてすでにガス家の平凡な日常的現実の中に生きているのである。ガスの倫理がジョージ・エリオットの到達した理想的な社会的態度であるとするなら何故作者はガスを『ミドルマーチ』の中心に据えなかったのかという疑問が当然おこる。むろんガスの世界それ自体には「劇」が展開される契機はないであろう。彼らにもし「劇」が生ずるとすれば、ガスの共同体への外部からの侵入によってしかありえず、その際彼らにはそれを撃退するだけの、ひとつの「家族」としての相互愛と血縁的団結の長い確固とした伝統がある。

ガスの人生観の特質は後述するように、「社会」の複雑さの解明にたいする一種の断念が、いわば代償的に、原理的支柱として伝統的な心情の「共同体」を要求したところから出発しているといえなくもない。

「社会」の複雑さ、不可解さの認識は、エリオットが「社会」の比喩として用いる「蜘蛛の巣⁽¹¹⁾」のイメージ、あるいはリドゲイトがミドルマーチの新病院付き牧師の選任に関する会議にでて感じた「つまらぬ社会的条件とその frustrating complexity の妨害的な thread-like pressure」というコトバからも推測されるが、この複雑さ・究明の非常な困難さがいわば窮余の支柱⁽¹²⁾としてガスの心情の共同体を要求したとおもわれるふしがある。複雑怪奇な「近代社会」という「蜘蛛の巣」は、これに不用意に——たとえその一本にでも——触れたばあいその結果は全く予測しがたい。それ故すでに証明済みの伝統的倫理に従って行動した方が無難である（ヘタをすると他人をわれしらず傷つけるかもしれない）、皮肉に極言するところということになるであろう。例の「フェリックス・ホルトの演説」中次の一節は極めて暗示的である。

政治とかまたいかなる社会的行動においても、自分以外の他のひとたちがどんな結果になろうと知ったことではないと言うなら、それはいままで自分に不満をもたらしていた最悪の行為そのものを擁護していることになろう。自分が、しっかりあみこまれている社会という大きな精妙な網状組織（‘fine wide-spread network of society’）にたいして、その糸を引っばるとどうということになるか気にも留めずに各人が自分の快樂のために引っばったり突進したりすること以上に良い。人間にと

って必要なルールはないと言うにひとしい。

このように‘network’としての「社会」のイメージには当然その複雑さとそれ故の不可解性の認識がある。そして「社会、国家は対立的な主義・行動によって結合されている——相互依存と、危害を防止するための共通の利害の感覚によって結合されている」というとき、すなわち自己の階級の利益のみでなく「一般的な善」を考えねばならないというとき、社会有機体説まで一步である。案の定「唯一の階級よりなる社会はない。社会は不思議な生命あるもの、各部分が相互に依存しあっており、その微妙な依存性のためにとかく、ひどく悪くなる傾向をもつあの人間の身体」という伝統的な社会観が述べられ、制度的には現秩序の固定化が唯一の必然として主張される。

さて、社会が着実に改良され、最大の悪を減少せしめうる唯一の安全な方法は、現にある階級差別と利益を直接廃棄しようとすることによってではなくして……階級利害を階級の機能ないしは義務に転化することによってである。すなわち各階級が、国家全体への責任の強い圧力の下にそれぞれ独自の仕事を、その周囲の条件にしたがって遂行しなければならない。

ジョージ・エリオットには人間を自然状態に放置したばあいには人間社会はエゴイズムの闘争の場、アナーキーになるという認識がある。この認識、あるいは危惧は基本的に正しい。したがって政治制度をいかに変えてみたところで労働者が「無知」ととどまる限り、また利己主義ではなくして‘fellow-feeling’を持たない限り、その変革も無意味であるといいたいのである。それは現実の政治及び政治家への絶望の所産であり、いわば「哲人政治」への期待につながる——「賢人らに主たる権力を委ねること、すなわち人類が現有している最も真なる原理にしたがってわれわれの生活を規制せしめること——これは知恵(wisdom)の観念と同じほど古からの問題である。」

さて、ガス家の特徴として、エゴイズムの否定ないし欠如、そしてその分に応じた義務の遂行など保守的な心情をあげたが、それはいま説明した「フェリックス・ホルトの演説」の趣旨(窮極的には(社会有機体説))のさながら実現であるといっている。

また同「演説」の底を流れる決定論はたとえばガス夫人の人生態度のうちに生きている——彼女は「変更しえないもの(what is unalterable)を識別し、不平を言わずにそれに服する稀なる感覚をもっていた」こうした態度は一切の illusion を自

らに許さない人生観に結果するであろう。

そこでガースの倫理を共同体的 'fellowship' に支えられた・illusion とエゴイズムの否定の倫理と規定できよう。また近代的個人主義の挫折ないしは破産の認識の裏返しとも見ることもできよう。そしてそれが理想的な美徳として積極的な価値に転化された時、一種のユートピア的色彩をおびることは避けがたいであろう。ジョージ・エリオットのなかのドロシヤ的熱情——近代的個性の自由追及・自己実現——の挫折が反射的に過去を回顧するときにあらわれる郷愁の世界にそれは似てもいるのだ。

Basil Willey が巧みに分析しその上にたつて C. B. Cox が要領よく展開してみせたように、人間の進歩にたいする近代的信念——自由精神の発展への素朴な信念——とその反対の自己抛棄・伝統的秩序への復帰を両極とする解決のない往復運動のダイナミズムとしてエリオットの思考の構造を把握することができる。

ドロシヤの強烈な魂の挫折についての作者の態度には哀惜と批判のアンビヴァレンスが認められる。彼女の魂の高貴さはやさしく肯定しながら、その現実洞察の甘さ、素朴さを批判する。そこにガースが社会的善（隣人愛へと転化した）の意志と現実への洞察力（illusion をもつべきでないとする）の両価値の所有者として積極的意味をもちはじめののだが、David Daches はガースについて次のように言っている。

ガース家は『ミドルマーチ』の全人物のうちでいちばん、家族として完全に描写されているが、彼らがこの小説のモラルの中心としてうけいられるのはこの描写の完璧さにある。⁽¹⁶⁾

このようにガースが単なる理念ではなく完全なリアリティを具えていること（家長ケイレブは作者の父の面影をうつしたもので、また長女メアリは、ドロシヤ以上に作者自身に似ている）を指摘したあと——

それはこの小説のモラルのボタンを確立する役割をはたしているし、他の人物に起こる事はどれもなんらかの点で、ここに与えられたモラルの中心と関連づけることができる。

ガースの倫理的意義をこのようにほとんど絶対的価値として評価するのは『ミドルマーチ』の印象からかなり無理とおもわれるけれど、ガース家のみかひとつの血縁共同体（家族）として描かれている（24章、25章、40章）ことはたしかだ。ガース家に

は「相互愛の長期の習慣からくる安定」がある。およそこの家族には相互に対立抗争する契機はない。ガス夫妻の完璧な和合と子供たちの父母への敬愛——⁽¹⁷⁾ 理論的なメアリが人生にたいしてシニカルになることを防いだのはこの両親への敬愛があるからである——が、物質的困難や外敵の脅威をのりこえさせる。ここでは家長ケイレブを中心とするほとんど理想的なペイトリアーカルな共同体の人間関係が結ばれ、またこうした「家」の秩序が各成員に精神的緊縛として感じられていない。一定の伝統的秩序のなかに過不足なく適合した安定感がここにはあって、こうした秩序を離脱して、あるいは抵抗して、それによって自己実現をはかろうとする努力（自由精神の展開）に不可避な、あの孤独感、疎外感とは無縁のユートピア（保守的といってもよい）世界である。ガス家はミドルマーチの世界の諸悪と積極的に抗争することはない、それ自体独立した、いわばコロニーを形成し、独自の保守的価値を生きるのである。

ガス家に起り、それを通じて彼らの価値が発揮される場面は次の五つである。

1. フレッド・ヴィンシーの借金に関連して
2. フェザストンの遺言状をめぐって
3. フレッドの就職
4. 鉄道工事の測量妨害事件
5. パルストロードの代理人の辞退

ガス家の事件が起るのは 23 章、ガス家の親戚であるヴィンシー（工場主）の長男フレッドが、ケイレブ・ガスに借金の連帯署名を求めに来たことから始まる。「フレッドは、少額の借金を返済する資金がないために人から軽蔑されるのはたまらなかつた。かくて頼む友として撰んだのが最も貧乏にして同時に最も親切な人間——すなわちケイレブ・ガスという次第になったのである。」⁽¹⁸⁾

ガス共同体への第一の試練は、ミドルマーチの有力者で工場主のヴィンシー家のフレッドによってである。彼はミドルマーチのブルジョアの雰囲気を身につけた青年紳士で自己の快樂のために他人を利用することになんら罪悪感をもたない人物、他我意識のない人物である。

一方ケイレブ・ガスはフレッドによってその性格を規定されているように「最も貧乏で最も親切」——むろん kindest であるから常に poorest なのだが——であるが、この性格は終始不変である。ケイレブのみならずガス家の人物はすべて変貌しない。彼らの外部的行動から周囲の人々が受けとる「像」はそのまま彼らの内面の真

実のナイーブな表現なのである。むしろ彼らに内面的葛藤がないわけではない。たとえば、フレッドの違約をめぐるガス夫人の内面相の描写(24章)、フェザストンの遺言状の書き替えに際して自分のとった態度がフレッドを不幸にしたと感ずるメアリの内的葛藤(40章)、またフェアブラザーのメアリへの恋に気づいた時のガス夫人のフレッドに対する態度(57章)などは、簡潔ではあるが心理分析がおこなわれている。

しかし総じてあたかも精神の葛藤などは無縁であるかの如き描写——すなわち人物が「性格」として行動のチャンネルを固定されている描写——が与えられているのは、彼らの性格そのものがナイーブであることは勿論であるが、むしろ、彼らの行動が、あの不変のガスの実践倫理によって常に、あやまりなく規制されていることに由るのである。

彼らは己れに決定されたノリを越えることなく、すなわち illusion と判断されるような夢想を自他にたいして抱くことなく、与えられた環境のうちに充足して生きているがゆえに、内的葛藤はなく、従ってその行動は内面と直結して明快である。

ジョージ・エリオットの人物造型には、人物の内面相の曝露・心理の展開を通して行うばあいと、ガスのようにほとんどその言動の描写ですますばあいと、二種類ある。そしてそれら二つの対立する人物造型は、彼が伝統的環境にたいして対立的であるか適応的であるかに窮極的には由るのであろう。

たとえば、ドロシアの「人間の性格がなによりもその人のことを語ってくれる」という見解にたいしてフェアブラザーは次のように言う。

「しかしカソーボン夫人」とフェアブラザー氏は言った、「性格は大理石に刻みこまれてはいけません——堅牢不変なものじゃないんです。性格は生きもので変化するものですよ。人間の身体と同じこと、病気になることだってあります。」
(19)

これは町医者兼医学研究者リドゲイトにたいする世間の疑惑にドロシアが彼の「性格」の高潔さをもちだして彼を擁護したときの対話の中にある。

またリドゲイトのミドルマーチへの登場に際して、作者は、今後彼の熱烈な目的が環境によっていかに変容をこうむるかは興味ある賭けの材料ではないかと誘いをかけ次のように人間の将来の不可測性について語っている。

リドゲイトの性格をいくら精しく知って見たところで危険は残るであろう。なぜなら性格もまたひとつの過程であり展開だからである。
(20)

リドゲイト、ドロシア、カソーボン、ロザモンド等、彼らはひとしくそれぞれの仕方で現状に満足せず、自己と環境との矛盾の反映である内的葛藤の圧迫の下におかれる。内面にこそ人間存在の意義とリアリティがあるといたげである。

もうひとつ例をあげよう。カソーボンの実体に関してである。

ドロシアにとってカソーボンは、彼女の若々しい illusions というすばらしいタキギに火をつけたきっかけにすぎなかったとしたら、しからば、いままで彼に関してとやかく判断を下してきた、より冷静な方々の精神のなかに彼の像が正しく表わされているということになるのか。私は一切の絶対的判決、偏見……意見……に抗議する……
(21)

といて、作者だけしか知らないカソーボンの内的葛藤の真相の説明をはじめなのである。

これらいわば主体と環境の矛盾を生きる存在者たちと区別されるところにガス家はほとんど完全な美德の体现者として即自的に生きているのである。

さて、ケイレブ・ガスはフレッドの借金の連署をきさくに引きうけるが、それはひとつにはフレッドの性格を高く買っているためである——「きつといつかはよくなるさ——あけすけで根はいい奴だから信用できるよ。」

ケイレブのこの洞察の正しさは結局は証明されるのだが、さしあたってはフレッドの遺産の見込み (illusion) が外れてガス一家は直接その迷惑をこうむることになる。

ここで問題なのは、フレッドの他人の迷惑にたいする不感症をその本質に根ざすものではなく——それ故、ミドルマーチの代表的なエゴイスト達、ロザモンド、カソーボン、フェザストン等のそれとは異り——「希望にみちた青年紳士」に共通な想像力の欠如にある——すなわち彼の年齢と彼の所属するブルジョワジーのエゴイズムにあるとしている点であろう。

返済の見込みがたたなくなり、ガスに告白せねばならなくなった時、フレッドが最も恐れたことは「名誉失墜」である。ケイレブの驚きと困惑、ガス夫人は直ちに、次男アルフレッドのための貯金とメアリの給金の貯金でこれを埋めあわそうと提案するところには夫婦の困難に対処する際の協力の美德が（特にロザモンドとリドゲイトの夫婦のばあいと対照的に）示されている。ともあれ——

ガス夫人はフレッドに生まれてはじめて良心の呵責に似たものを感じさせた。まことに不思議なことだが、この事件にたいしていままで彼が感じた苦痛といえ、きつと自分は不名誉な男におもわれて、ガス家での評判がおちるにちがいないという意識にあった。彼の違約がガス家の人々のうえに惹き起こすかもしれぬ不自由や損害などに心を使うことはなかった。他人の必要物に想像を働かすなどということは、希望にあふれた青年紳士には珍らしいことなのである……しかしこの時突然、自分は二人の女の貯金を盗む哀れな悪漢だということを知った。⁽²²⁾

ガスはこのようにミドルマーチの住人にたいして倫理的教育の——フレッドにたいしては直接的な——機能をはたす。隣人にたいする素朴な信頼の美德と信頼を裏切る恐ろしさの意識。そしてエリオットの倫理とはまずおのれの内部にエゴイズムを確認することにほかならない。

フレッドの他我の発見は自己発見とうらはらである。「他人への想像力の行使」は、fellowship を成立させる前提、他者にかかわる sympathy の起動力としての感受性の基本的な機能である。フレッドへの「想像力」はもっぱら自己の未来へ働いていたのである。すでにフェザストンにたいするフレッドの認識の甘さについて作者は次のような批判を下している。

フレッドはフェザストンの魂の奥底を見抜いたと思った。その実彼が見たのは自分の性向 (inclinations) の反映にすぎなかった。他人の魂を知るという困難な仕事は、主として自分の願望 (wishes) よりなる意識の持主たる青年紳士にはむかない仕事である。⁽²³⁾

またフェアブラザーがひそかにメアリを愛しているのに、フレッドの頼みでメアリの愛を確かめる役をひきうけたのを知ってガス夫人は一般論の形で次のようにフレッドの他者の魂への想像の欠如を批判する。

「若い人たちはたいして自分の願望 (wishes) 以外には盲目です。その願望がどれだけ他のひとを犠牲にしているか想像してみることはめったにありません。」⁽²⁴⁾

想像力が自己否定の上に——一切の利己的な wishes を抛棄した——他者の魂への洞察として機能することは困難だという認識——すなわち想像力が成熟した知的判断力

と感受性に制御されないときはその「像」は illusion でしかないという認識がここにはある。

ドロシアやカソーボンをはじめいかに多くのミドルマーチの住人たちがこの自らつくりだした虚像、あるいは他人によってまといつけられた虚像——opinion とか prejudice とかの（前に引用したカソーボンの性格描写についての作者自身の説明を参照）——に躓き傷ついたことか。

illusion を捨てることはガス家の倫理的要請ですらある。フレッドの発展はこの他者の存在にたいする謙虚な反省と illusion の克服にある。作品の結末に概観されるフレッドの生活態度はあの実直なガス氏に似てまことに堅実である。

ところでフェザストンの臨終につきそっていたメアリの正しい行為が結果的にはフレッドに（遺産の帰属に関して）不幸をもたらしたためにメアリは悩んでいる。これは倫理的感受性の点でエリオットのなかで極めて重要だと思われる。ガス夫妻とフェアブラザー牧師の間での次のようなやりとりの中で——メアリの内面描写を通じてではなく、なぜなら、ガス家は、各成員の内面が相互に共有されるような心情的共同体であるから——表現される。ガスは言う。

「メアリのしたことは正しかった、でもあの子は正当防衛のために意志に反して人の持物にぶつかってこわしてしまったような感じがするっていうんだ。わしにはあの子の気持がわかる……」

「フレッドにどんな影響を及ぼすか、よしんば解っていたってメアリにはほかにどんな行動もとれなかったでしょうよ」とガス夫人が言った……「正しい行為をしたために他のひとが損をしてもそれを良心の重荷とすべきじゃないとわたしは思うわ。」

牧師はすぐには答えなかった。ケイレブが言った、「感情 (feeling) の問題なんだ。あの子はそう感ずる (feel) んだ。わしの感情もあの子とおなじだ……」

「その点ではきっとガス夫人だって同意見でしょう。」とフェアブラザー氏は言った……「あなたがフレッドのことでおっしゃった感情が悪い——いやむしろ誤っているなどと誰にも言えないと思います——といって誰であれそうした感情をひとにおしつけることはすべきではありませんが。」
(25)

おそらくフェアブラザー氏の意見が中庸を得た意見であろう。人間関係における「感情」、倫理的感受性の重要性が——おのれの意に反して傷つけた他人のうえにも想像

を働かすメアリのやさしさがここで指摘されている。あのドロシアですら夫カソーボンの内的葛藤 ‘inward trouble’ に気附いていないと批判されているほど、本来他者への想像力を働かすことは困難なのである。⁽²⁶⁾

このようにガス家の人々は illusion から解放されている。たとえば前述のガス夫人の人生受容の態度にもうかがわれるし、またメアリについて「正直さ、真実を語る公正さがメアリの支配的な美德であった。彼女は illusion を与えようとはしなかったし、自分で illusion にふけることもなかった。気分のいい時には自分を笑いものにするユーモアがあった。」⁽²⁷⁾といい、また――

メアリは思索を愛した。明け方膝に手をおいて坐っているのが楽しかった。物事は自分に満足を与えるように整えられていそうにないことを早くから信ずる理由が彼女にはあったので、そういう事実におつかって驚いたり困惑したりして時間も浪費することはなかった。すでに人生を喜劇とみるようになっていた。この喜劇で自分は卑劣なあやふやな役は演じまいという誇り高い、いや高潔な決意をもっていた。もし彼女に尊敬する両親がなかったらシニカルになったろう……⁽²⁸⁾

‘Things were not likely to be arranged for her peculiar satisfaction’ という成熟した現実洞察、自己認識の反映としての自己抑制がほとんど女性の理想像としてここにある。

これに関連して Barbara Hardy は「ジョージ・エリオットは成熟 (maturity) とは illusion をもたずに生きる能力とみている」といい、また David Daches は「これは極めて慎重なバランスのとれた態度であり、その背後に作者の賛成があることは疑いない。この点からみると小説の冒頭にあらわれたあのセント・テレザの概念はどうなるのか。ここまできると、それは人生にたいす不当な要求の一形式とみられ、それを抛棄することが道徳的成熟の役目なのである。」⁽³⁰⁾といている。

しかしこのメアリの「成熟」した人生観はそのまま前述の「決定論」につながる。「決定論」は諦念の正当化の側面をもち、illusion の抛棄は現実との抗争に捲きこまれることを恐れる気持の反映の側面をもっているのではないのか。

ケイレブの「労働観」とその現状満足の性格の功罪について検討してみよう。

ケイレブは「社会に衣食住を供給する多頭多手の労働の不可欠の力、価値」につい

て考える。彼は少年時代から労働の中に生活し「労働」は彼の詩、哲学、宗教である。彼は職業を「労働、政治、聖職、学問、娯楽」に分類する。そしてあとの四つについてなんら反対はないが、「異教徒が他の宗教の神を眺めるように眺める。」また rank（階級、身分）についてもすべてよしとしている。そして――

彼の実際の神々は、すぐれた実際的な企画、正確な仕事、誠実に事業を完成させることであった。彼にとって闇の王は怠慢な労働者であった。しかしケイレブには否定の精神はなかった。彼にとってこの世はまことに不可思議(wondrous)なものであったので、最善の排水工事、堅実な建築、正確な測量、賢明なボーリングなどに明らかに抵触しないかぎり、いかなる制度がいくつあったってかまわなかった。まことに彼は、強い実践的な知性を具えた敬虔な魂であった。⁽³¹⁾

要するに限られた専門領域におけるエキスパートであることに自負と責任をもち、それをこえた世の中のことはわからない（‘the world seemed to be so wondrous’）として立ちいることなく現状に満足している精神である。

ジョージ・エリオットが労働者階級というときそれは「モップ」のイメージと分ちがたく結びついている。したがってこのケイレブのおのれの仕事に責任とよろこびを感じている姿は cultivate された労働者の理想像といえるだろう。牧師就職を断念しケイレブの手伝いをするようになったフレッドに「自分の仕事を愛せ、労働を恥じるな」と教える。そして「たとえ総理大臣だろうと屋根ふき屋だろうと、自分の仕事をちゃんとしあげなけりゃ俺はビター一文だってやる気はない。」と断言する。⁽³²⁾

そしてこの自分に決められた仕事をやるということが結局、鉄道工事妨害事件に捲きこまれた時の彼の判断の窮極のよりどころとなる。鉄道敷設工事を妨害した暴徒らの主張――結局「この世は金持の世界で、鉄道は金持のもうけになるだけだ。世の中は貧乏人にはますます悪くなる一方だ。」――に対して、彼らの「感情の過程を通して彼らの知っている否定できない真実」を前にしては「彼らを感じていない社会的利益」の論議も無力だと感ずる。あんたは金持の味方かという問いに、「自分らにとって事態がますます悪くなるようなことはしない方がいい」と彼らしい忍従の知恵をすすめることしかできないのである。

このように現秩序の肯定を大前提とするガース家の人生態度、倫理は、ミドルマーチ的世界そのものを対象化し、それと対抗関係に入ることはない（なぜなら世界は‘wondrous’だから）。問題は常に自分の家族や職業及びその周辺に限られる（その

限界ゆえにユートピア的コロニーの印象がいつそう強い)。そしてもしこの共同体の生活が危機にたつときには、窮極的にはあの「決定論」がいわば安全弁として作動するにちがいない。しかしそれには illusion をもたないものの、現実に根ざした強みがある。伝統的な共同体の相互愛（経済的困難がそれを必然にする）の場としての「家族」と、地縁的かつ生産的に密接に結ばれたミドルマーチ的社界の秩序とを無条件的に受容したところの伝統的倫理がその実践可能性のゆえの強みを発揮しているともいえよう。ガースの自己否定・隣人愛の精神も、否応なしに共同体の制約下にあった古き倫理の残映なのではないか。ガース家の倫理の古さはなんといってもおおいがたい。およそこれと対照的な生活態度の持主ドロシアの精神の歴史を次に概観しよう。

第二章 ドロシア的葛藤

視点をガースからドロシアに移すと、そこに展開される世界の様相は忽ち変わってくる。ガースは『ミドルマーチ』の倫理的な軸をなしていたが、ドロシアは他の三人の主役たちと共に物語の展開の軸をなしているのである。

次の一節はドロシアの内面の分析である。

彼女は結婚生活の義務を以前は偉大なものと期待していたのに、今や家具や、雪煙に閉じこめられた風景と共に縮まっていくようであった。完全に気持が一致して（in full communion）歩こうと思っているあの澄み切った高原もいまは想像の中で眺めることさえ困難になっていた。完全な師（superior）の上に魂を翹わせるたのしさは、ゆすぶられて不安な努力に変わってしまった……淑女の世界の息のつまるような圧迫感があった。この世界ではさまざまな生産的な生活との結合感、彼女のエネルギーに形を与えてもくれもしたらうような要求という形で外部からやってくるのではなくして、内的ヴィジョンとして辛くも維持しなければならないのであった……結婚は、立派な肝要な仕事へ導いてくれるはずだったのに、あの淑女の圧迫的な自由からまだ彼女を解放してくれなかった。

(1)

ドロシアの物語は disillusion の物語である。その disillusion のなかに、『ミドルマーチ』世界の理解を晦渋なものにする二重の原因がある。第一にそれは、ミドルマーチ社会そのものに潜む客観的条件、その壁の絶対的な強固さ、複雑さであり、第二にドロシアの主観的条件、その壁に抗しうる手段に対する無知である。したがって、前

者に力点をおいて『ミドルマーチ』を規定すればおそらく悲劇的な「社会小説」となり、後者に力点をおけば、實際的経験を通じて人間的な発展を描く「教養小説」(Bildungsroman)となるだろう。ドロシアの物語はその双方を、しかしかなり不徹底な形で描いたものと見ざるを得ない。ミドルマーチの壁に挑戦する悲劇のヒロインとしては行動力を欠いているし、「教養小説」としては社会的諸相への言及と描写が多すぎるのである。

ドロシアのピューリタンの熱情は、「完全な師」との結婚を通じて、ミドルマーチの地主階級の淑女の世界の圧迫的な自由から脱出し有意義な仕事をするのである。閉鎖的・自己満足的な、孤立した世界を去って生産的な生活との結合感(‘sense of connection’)を獲得することである。それはカソーボンの仕事——The Key to All Mythologyの研究——の手伝いをするのであり、かつ文字通り生産活動に従事している人々の助力をすることもである。

ガス家がおそらく経済的理由から、相互協力的・共同体的関係が所与としてあったのに反し、ドロシアの「淑女の世界」は本来、閉ざされた孤立の自由を附与されている。その慣習的世界に自足しうる限りドロシアの不幸はもちろん起りえない。閉鎖性を脱していわば心情的な共同体的関係を求めようとするとき彼女は disillusion の経験をなめることになる。この孤独感と結合感との間に彼女の心理劇は終始する。「結婚」が彼女においては自己の存在理由をかけた問題であるがゆえに——すなわち、‘full communion’の成就される場として期待しているが故に、依然閉鎖的な世界に置かれた disillusion は大きい。

外的世界との結合感への希求は、フェザストンの葬列を見た時にもあらわれる。

なにか無縁な、よく解らないものと彼女の経験の最も奥底にある秘密とこのふたつの夢のような結びつきが、ドロシアの本性である熱情そのものからでてくる孤独感を映しだすようにおもえた。往時の郷士たちは稀薄な社会的空気のなかに住んでいた。山の上に点々と居を構え、山裾のゴミゴミしたあたりを、さだかに見分けることもなく見下していた。ドロシアはこうした高みからの眺望や寒々した感じのなかでは落ちつかないのであった。⁽²⁾

そしてミドルマーチ社会の代表的パーソナリティである妹のシーリアが「陰気なものや醜悪な連中は嫌いだ」というのに対してドロシアは「わたしは周囲の人々について知るのが好き。小作人は別としてわたしたちは隣人のことをなにひとつ知らないんじ

ゃないかしら。」という。

日常性を偉大性に転化させようという無暴な意欲——彼女の自己実現とは地主階級の孤立を離れて下層階級のなかに（生産的生活のなかに）結合感を見出したいという自己否定的な衝動でもある。

カソーボンへの献身を通じて得られるはずの‘communion’が彼のエゴイズムの前に成立しない。そうしたドロシアにとってウイル・ラジスロウは「牢獄の窓」のように感じられる。

時々ウイルに会う機会でも彼女の牢獄の壁に開けた、陽光の輝く空を覗かせてくれる
 明り通りの窓に似ていた。⁽³⁾

そしてカソーボンとの間には不可能だった communion がウイルとの間には成立する。ウイルがローマから帰ってはじめてドロシアとあう場面である。

ウイルは二ヤードほど距離をおいてドロシアに向かいあって坐った。光が、明るい捲毛と、あの反抗的なカーヴを描いている唇と頤をもった、繊細ではあるがいささか横柄な彼の横顔にふりそそいだ。二人は顔を見あわせた。それはさながらいまここに開いた二輪の花といったふうであった……豊かな感受性の持主だと解っているただひとりの人に恐怖心を感じることなく話しかけることは彼女の渴いた唇をうるおす清水のように思われた。悲しみを通して過去を回顧するために過去の慰めが誇張されたからである。⁽⁴⁾

ウイルのイメジは常に「光」や「水」といった生命を与える自然物のメタファーと結びついているのは当然であろう。

ウイルはドロシアに対するいわば精神の牢獄からの解放者としての役目のほかにカソーボンの実像を知らせる役割も担っている。彼女はウイルを通してカソーボンの学問の無益さを冷静にうけとることができるようになる。

人生の導師としてのカソーボンの像はこうして崩れ去る。

カソーボンのドロシアを自分の内部に立ち入らせまいという傾向、ドロシアの献身を拒絶する傾向はすでに新婚旅行の際にドロシアは痛切に経験したはずである（20章）。また、ウイルから彼の神話研究の無益を知らされると（21章）、ドロシアは彼との間に師弟間の親密な communion のなかに自己充実をはかりたいという希望を

抛棄せざるを得なくなる。

しかしカソーボンの人格の高潔さ (the great strength of his character, sense of right) に対する信頼さえ崩れるのは、ウイルの貧困を黙視すべきでないとする彼女の同情的な提案を、ドロシアが介入すべき問題ではないと拒絶する時である。ドロシアは「あらゆるエネルギーが恐怖によって阻止されるこの悪夢の生活に堪える力を与えよと心の中で叫ぶ。」

この章末で作者はカソーボンの夫としてのエゴイズム——ドロシアとの間の communion を拒絶し彼女を不断に孤独と恐怖の牢獄に閉じこめておく彼自身の牢獄——の構造を次のように説明する。

彼カソーボンは生涯、自己疑念と嫉妬の内的な傷を自分自身にも認めまいとしてきたのだった。そしてこの、すべての個人的な問題のうちでも最も繊細な問題については彼の傲った、疑惑にみちた寡黙の習慣が二倍も雄弁に語っていた。

42 章は、不遇 (あるいは不毛) の老学者の、「自己疑惑と嫉妬」に悩まされ、かつ死期の近いのを悟った瞬間の描写は心理分析の圧巻である。ここでは彼のエゴイズムの構造がより精緻に分析されている。

彼は病気の性質について医者のリドケイトに訊ねることもしないし、またドロシアにさえ悩みをうちあけない。

この点でも彼は憐憫をうけること恐れた。自分の運命に関するいかなることであれ、われしらず人から推測されたり知られたりしたことのために人から憐れまれるのではないかという疑いはみじめであった。驚きや悲しみをこだわりなく認めて同情のそぶりを乞うことは想像するだけでも我慢ならなかった。自尊心のある人ならこうした経験は知っという。おそらくそれは、孤立をはかる努力はすべて、崇高なものではなしに卑劣でケチな根性だとおもわせるほど深い仲間意識 ('sense of fellowship') によってのみ克服されるのである。

「高慢な・疑い深い寡黙の習慣」の度し難い「孤独地獄」がここにある。外界との関係を断絶し、それ自体独立したエゴイズムの世界。それを克服するのは、あのガス家に理想的に実現されている 'fellowship' の、共同体的な感覚によってのみである。

カソーボンとの communion, fellowship を求めようとする本来開かれた精神のド

ロシアを孤独と恐怖の牢獄に閉じこめるのはこのカソーボンのエゴイズムである。

ジョージ・エリオットの理想は、前章でも指摘したように、「社会」を fellowship で結合されたひとつの「心情の共同体」と化することである。そして「結婚」は最小単位の共同体であるが、彼女にとって、少くとも二人の男女の最も親密な関係のなかに「完全な communion」の実現を望んだのであろう。それはエリオットにおける「結婚」の倫理である。カソーボンにとってそういうドロシアの「結婚」観， communion の期待に沿う気は全然ない。ここでは communication すら成立しないのだ（彼の「寡黙」）。「彼女には過度の愛情がある，おれがそれに応えないので心の底ではおれを非難している」と彼は感じている。

ドロシアの内的葛藤とカソーボンの内的葛藤はそれぞれ孤立した領域において展開される。両者をつなぐものは習慣的な日常的行動の形骸のみであり，それぞれ相手にたいする疑惑と恐怖の感情を義務と習慣の鎧におし隠している。しかしごく些細なきっかけがドロシアの内面に劇的な波紋をかきたてる。彼はドロシアがさしだした腕をとろうとしなかったのである。この拒絶は憐憫を恐れる気持の反映である。

「私がなにをしたというのだろうか——あんな扱いをするなんて。あの方は私の気持（‘what is in my mind’）を知りはしない——気にもかけない。なにをしたって無駄じゃないかしら……」〔そして彼女は「憐憫」を捨ててしまう〕……一体あの人は何なんだろう？ 今や彼女には彼を評価する力が充分にあった。彼の意を迎えるために自ら卑下しておのきつつ彼の視線に奉仕し，自分の最良の魂を牢獄に閉じこめ，魂にはひそかに会いに行くしかなかったドロシアである。

彼女は今度こそ自分の内面的真実（‘the truth about her feeling’）を彼に伝えようと決意する。しかし憤怒は次第に変じて、「高貴な魂の習慣」が蘇り「決意の服従」がやってくる。

恐怖から憤怒へ，そして自己主張から再び自己抛棄への emotion のダイナミズム——パーソナリティを構成する情念と当為との抗争における情念の屈服にちがいない。自己主張の情念そのものの否定ではなく，彼女にとっては，義務に反する故の情念の否定である。情念の展開そのものの否定はドロシアのパーソナリティそのものの否定に通ずる。自己主張としての「憤怒」の情念が自己抛棄としての「優しさ」「いたわり」の情念——義務感に支えられた——に屈服したということなのである。

彼女がカソーボンから受ける最後の試練は 48 章，死後彼の仕事を継承してくれる

ように頼まれたことである。

彼女にとってカソーボンとの結婚生活はすでに「絶対に光明を見出せはしないものを産みだすためのぞっとするような苦役の装置が存在する事実上の墓場」である。頭(head)では夫の学問の意義を否定しながら——彼女の側の自己肯定——心情(heart)的にはカソーボンの願いを肯定——彼女の側の自己抛棄——せざるをえないという葛藤。そしてやはりドロシア的決意、自分より相手の気持を傷つけることを恐れる倫理的感受性が優先するのである。「ドロシアは自分の運命(doom)に諾と言おうとしているのを感じた。夫に鋭利な刃の一撃を加えることをおもうとあまりにも恐ろしく、ただ完全に服従するほかなかった。」そして夫の意向にしたがう旨を彼のいるところに告げに行く。以前彼女がさしのべた手の拒絶されたあの場所へである。

あの時は fellowship への努力が迎えられないのではないかが心配であった。いまは自分が恐れる fellowship へ自ら縛りつけねばならないと予想している地点へ行くのが恐かった。法律も世間の人々の意見も彼女にこれを強制はしない——ただ夫の性格と彼女自身の同情が、観念的ではあっても決して真実ではない結婚という枷がそうさせるのであった。彼女には状況がくまなく見えた。だのに彼女は足枷をはめられていた。自分の魂に哀願するうちのめされた魂を打つことはできなかったのである。

もはやここでドロシアの本性についてくたぐたく語り語る必要はあるまい。彼女が夫に告げに行くと彼は心臓の発作で死んでいるのが発見される。彼女は幸運にも彼のエゴイズムの終身徴役囚たる境涯から解放されるわけである。以後の彼女の行動はカソーボンとの痛酷な経験の上にたつて、まさに隣人愛的行為——経済的逼迫、妻ロザモンドとの疎隔・対立、そして周囲の疑惑の眼に悩むリドゲイトの友として、またロザモンドにたいする友情(81章)においても——の権化といった体裁を示す。そしておそらく夫の理想像たるウイルとの嵐の舞台での communion(83章)のうちにドロシアの物語は終る。

ではドロシアとカソーボンとの結婚の悲劇(?)はどこにあったのか。いうまでもなくそれは、彼女の人生体験の未成熟さ——現実洞察力の不足——と、それをいわば隠蔽する熱情との結びつき、つまり illusion なしでは生きられない性格にある。カソーボンのエゴイズムを見抜き得ず、彼を理想化することは、カソーボンの本性を自

己に従属させる意志と解すれば、これまたエゴイズムということになるろう。

リドゲイトとロザモンドの不幸な結婚も、結局は彼らが自分の結婚観にしたがって互に相手に抱いた illusion の所産といてよい。「ロザモンドのえがく物語ではヒーローの内的生活とか彼の仕事とかは想像する必要はなかった。もちろん彼は知的職業をもち聡明であった。しかしリドゲイトに関して素敵なことは彼の毛並のよさであった。その点でミドルマーチの彼女のとりまき連中と違っていたし、彼と結婚すれば身分が上る見込みがあった。」一方リドゲイトは「もし結婚するなら、彼の妻はあの女性独得の魅力、花や音楽の分類に入るあの女らしさ、あの本質的に貞淑な美」を持っているはずであった。ここには結婚の基礎として不可欠な（とエリオットの説く）精神的協力関係 fellowship の成立はおよそ考慮されていない。

ところで第一章で詳述したように、ガス家のひとびとはかかる illusion の一切から解放されている。ガス夫人の妻としての態度——「彼女は変更しえないものを識別し不平を言わずに従うあの稀なるセンスをもっていた。夫の美点を尊敬していたので、彼が自分の利益を考える能力のないものともうずっと以前に決めてしまっていた。そしてその結果生じた事には笑って対処してきた。」ここにはロザモンドが不満を表明したところの「結婚の条件そのもの、すなわち結婚が自己抑制と寛容を要求するということ」の見事な実践がある。

またガス氏はメアリへの忠告のなかで自分らの経験を示して結婚には「忍耐」が必要であることを説き「若い連中は人生とは何かを知るまえにもう愛しあうようになるようだ、彼ら是一緒になれさえすれば人生はお祭りだとでも思っているのかもしれないが、じきに平凡な毎日になってしまうんだよ。」という。メアリは父の忠告をうけるまでもなくそんな事は承知である。彼女がフレッドと結婚するのは常に愛しつづけてきた彼が実直な男に生れかわったからである。

メアリ・ガスとフレッドとの結婚の過程にはおそらく、ドロシアのそれに似た情念の劇はないだろう。しかし二人の間には静謐な、とでもいうべき fellowship があったことは後日譚のなかに明瞭である。

* * * * *

以上ガス家の倫理の意義に関して、ドロシアの理想とその挫折との対比において述べてきた。

むろん Arnold Kettle が次のように言うのは正しい。「なるほどメアリとガス—

家は十九世紀道徳のいやらしい側面——フェザストン老人の金銭欲、バルストロードの偽善——を拒絶しはするが、ミドルマーチの基本構造は妥当な、不可避なものとしてうけいれている。現状 (status quo) のワク内での廉直勤勉はメアリがフレッドに要求する行動の理想であり、その限りでは結構な基準ではあっても、この小説が全体として、あるいはその中心テーマとして提起した深い道徳問題にたいする解答としては不適當である。」

(10)
しかしガースが、ガース家のみが作者の倫理的批判の対象にならなかったのは、たとえ無意識的にせよジョージ・エリオットの思想のなかでガースの人間及び人間関係は実践的倫理の理想として、少くとも、ドロシア的理想の挫折の際の安全弁として位置づけられていたとみななければならない。

ヴィクトリア朝社会の動きのとれぬ閉鎖性とその複雑怪奇さに立ちむかったドロシア的精神も結局、ヴィクトリア社会の秩序のなかに吸収されざるをえないという現状不可変性の認識が、社会的には後向き^の人間関係——ガース的な共同体——を理想化し、ガースとドロシア双方に共通な行動規範としての fellowship, communion の絶対化に拍車をかけることになったといえよう。

註

はじめに

- (1) *Galaxy*, XV (March 1873) 中の評, Gordon S. Haight 編 *Middlemarch* (Riverside Edition B 6) 序文参照。
- (2) 拙論「ミドルマーチ」序論 (人文科学研究 6 一橋大学研究年報 1964) の序章を参照していただければ幸いである。本論は、「序論」のあとをうけた各論としてガース家に視点を集中した。
- (3) Gordon S. Haight 編 *The George Eliot Letters*, vol. V, p. 291. George Henry Lewes の出版者 John Blackwood への手紙 (13, July 1872)。

第一章

- (1) *Middlemarch*, Prelude 中のコトバ。
- (2) 同上。
- (3) 前出拙論参照。
- (4) Raymond Williams: *Culture and Society 1780—1950*, Pt. I, Ch. 5.
- (5) Thomas Pinney 編 *The Essays of George Eliot* (Routledge and Kegan Paul; London 1963) 中 27 Address to working Men, By Felix Holt のまえがき参照。
- (6) 同上。

- (7) Chapt. 39.
- (8) Chapt. 56.
- (9) Chapt. 23.
- (10) Chapt. 24.
- (11) Chapt. 15.
- (12) Chapt. 18.
- (13) Chapt. 13.
- (14) Basil Willey: *Nineteenth Century Studies* (Chatto and Windus. 1949), chapters VIII—IX.
- (15) C. B. Cox: *The Free Spirit* (Oxford Univ. Press. 1963), chapt. 2.
- (16) David Daches: *George Eliot: Middlemarch* (Edward Arnold: London, 1963), pp. 56—57.
- (17) Cox 上掲書。
- (18) *Middlemarch*, chapt. 25.
- (19) Chapt. 72.
- (20) Chapt. 15.
- (21) Chapt. 10.
- (22) Chapt. 24.
- (23) Chapt. 12.
- (24) Chapt. 57.
- (25) Chapt. 40.
- (26) Chapt. 20.
- (27) Chapt. 12.
- (28) Chapt. 33.
- (29) Barbara Hardy: *The Novels of George Eliot*, p. 196.
- (30) Daches 上掲書 p. 57.
- (31) Chapt. 24.
- (32) Chapt. 46.

第二章

- (1) Chapt. 28.
- (2) Chapt. 34.
- (3) Chapt. 37.
- (4) Chapt. 37.
- (5) Chapt. 16.
- (6) Chapt. 16.
- (7) Chapt. 24.
- (8) Chapt. 75.

(9) Chapt. 25.

(10) Arnold Kettle: *An Introduction to the English Novel*, vol I., p. 185.